

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (14)

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。それらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、彼らの言説の誤りを総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。

注本文中、真の父母様のみ言や「原理講論」等は「青色」で、サンクチュアリ教会側の主張は「茶色」で色分けしています。

【27】人間始祖である「真の父母」に後継者は存在しない

①「真の父母」は唯一無二

サンクチュアリ教会を支持するある人物は、「真のお父様が後継者に亨進様を任命の日以後、真のお父様が後継者を韓オモニに変更された根拠となるみ言を提示してください。父子協助時代の今、父子関係でない韓オモニが後継者になっていることは原理的ではない」などと述べ、真のお母様を批判します。

しかし、この批判は、真のお父様のみ言に反する非原理的な主張です。

「真の父母」とは、人類の人間始祖の立場に立たれた唯一のかたです。したがって、「真の父母」に、後継者が現れると主張すること自体が、非原理的主張にほかなりません。真のお父様は、古希（七十歳）を迎えられた一九九〇年、モスクワ大会（世界言論人会議）の勝利の基台の上で、同年四月三十日から五月二十二日にかけて

韓国十二大都市を巡回して「勝利婦国報告大会」を挙行され、「真の父母宣布」すなわち「メシヤ宣布」をされました。古希を迎えられたお父様は、次のように語っておられます。

「これからは先生がいなくても、お母様一人のみで何の支障もないのです。今までは、女性が天地を代表する摂理の代表者として立つことはできなかったのですが、父母の愛と一体的理想を中心として、初めてお母様を中心とする女性全体の解放圏が地上に宣布されたのです。…真の父母の聖婚から三十年たつて女性解放を宣布したというのです。ですから、先生が一人でも真の父母様の代身であり、お母様が一人でも真の父母様の代身です。」

「レバランド・ムーンが古希を過ぎて七十を超えたので後継者が現れないのか？ そんな言葉はやめなさい。…ですから、先生

が第一教主、その次に、お母様は第二教主だということですよ」(マルスム選集二〇一―二二六、一九九〇年三月二十七日)

真のお父様が「後継者…そんな言葉はやめなさい」と語っておられるように、人間始祖であられる「真の父母」に、後継者は存在しません。もし、立つとしても、それはあくまでも真の父母様の「代身者」であり、信仰の「相続者」です。たとえ真の子女様であっても、それは「子女」であって、人類の「真の父母」になることはできません。真のお父様は「真の父母」について、次のように語っておられます。

「真の父母様は、一組だけです。今この時の一度だけだったので。過去にもいかなかったのあり、未来にもいません。真の父母様が肉身をもって実体で存在するのは、この時だけだとい

うのです。永遠の中でたつた一度です」(マルスム選集二四六一―四四)

「アダムとエバは、神様が本来、当に願う真の人類の先祖、人類の真の父母にならなければならなかったのです。…それにもかかわらず、アダムとエバは、勝利的な実体として現れることができました」(八大教材・教本『天聖經』二二七―二七ページ)

「墮落がなかったならば…アダムとエバは、真の愛による理想的な真の夫婦になり、さらには真の父母となつて、その子孫と全人類の真の先祖になつていたはずですよ」(同、二二六―二二七ページ)

「真の父母」とは、本来、アダムとエバが墮落しなければ、人類の先祖として、人類という「血族」の出発点、すなわち勝利された「人間始祖」に位置する存在です。しかも、その「真の父母」は、実体を持った「神

様の立場」でした。真のお父様は「平和メッセージ」で次のように語っておられます。

「アダムとエバが完成して完全一体を成した愛の実体になれば、そこに神様が臨在して人類の真の愛の父母になろうとされたのです。…神様は、真の愛を中心としてアダムとエバに臨在されることにより、人類の真の父母、実体の父母としておられ、アダムとエバが地上の生涯を終えて霊界に行けば、そこでもアダムとエバの形状で、彼らの体を使って、真の父母の姿で顕現されるようになるのです」(『平和神經』五四―五五ページ)

人間始祖アダムとエバが完成して人類の「真の父母」になれば、彼らは実体を持つ「神様の立場」に立つようになっていました。「真の父母」は唯一無二であられ、「人間始祖」を表す概念であることが明確に分かれ

ば、その「真の父母」に対し、真のお母様と子女様を比較して、「どちらが後継者か」といつて論ずること自体が、実に愚かな議論です。

人類の「真の父母」が顕現された今日、真のお父様と真のお母様に代わつて「真の父母」になりうる人は他にありません。だからこそ、お父様は「先生が一人でも真の父母様の代身であり、お母様が一人でも真の父母様の代身です」、「後継者…そんな言葉はやめなさい」と語っておられるのです。

②天一国の中心は「真の父」と「真の母」である

前述したように、サンクチュアリ教会を支持するある人物は、「父子協助時代の今、父子関係でない韓オモニが後継者になつていないことは原理的ではない」と愚かなことを述べ、真のお母様を批判します。

この分派の「父子協助時代」

のみ言改竄と悪用については、前回(第13回)の「分派のみ言改竄に要注意」で論じています。簡潔に述べると、「父子協助時代の」宣布とは、真のお父様が母の国、日本の救済措置のために宣布されたもので、真のお母様のことを語っておられるのはありません。

真のお父様は、「父子協助時代」になつたので真のお母様は必要ないと語られたことはありません。むしろ、世界平和統一家庭連合時代の開幕宣布で、「長子と次子は母親の名のもとに絶対服従しなければならぬので、服従するようになれば父と連結します」(『主要儀式と宣布式』一五一―一五二ページ)と語られ、子女である長子と次子は「母」に絶対服従してこそ、父に連結すると語っておられます。

この「母」を通じてこそ「父」に連結するという原則は、家庭連合に限らず、キリスト教においても同じことです。聖書に





2001年1月13日 神様王権即位式



2005年2月14日 天宙統一平和の王戴冠式



2009年1月31日 万王の王神様解放圏戴冠式



2006年6月13日 天地人真の父母様天正宮入宮・戴冠式

導いていくことを知らなければなりません。天一国の永遠の中心は、天の父母様と真の父母様であり、子女はその真の父母様の「代身者」、信仰の「相続者」にすぎません。どんなに優れた子女様であっても、「真の父母」に代わって後継者となることはできないのです。

今は実体的天一国の実現、完成に向かつて歩んでいる「ビジョン二〇二〇」の期間です。私たちは、天の父母様および真の父母様（霊界の真のお父様、地上の真のお母様）を中心として歩んでいかなければなりません。

真のお父様は、二〇〇八年四月六日、ハワイで「真の母およびアベル・カイン一体化の特別式」を挙行され、真のお母様を真ん中に顕進様、國進様を立てられ、互いに手をつなぐよう指示されて次のように語られました。

「あなたたちカインとアベルがお母様の言葉に絶対服従しなければなりません。……あなたたち兄弟同士で争って分かれることはできません。それが父母を殺した元凶です。ですから、我知らず憎みます。声を聞くのも嫌で、歩いて行くのを見れば、後ろからついて行って殺したい思いが出てきます。あなたたちに、我知らずそのような思いが出てくるというのです」（『ファミリー』二〇〇八年六月号、三〇ページ）

真のお父様が語っておられたように、まず「真の母」を中心に子女が「真の母」に絶対服従して一体化することで「真の母」につながることが、神の摂理を進めていく最大のポイントです。もし、それが成されなければ、真のお父様が語っておられたように「それが父母を殺した元凶」になっていく事実を知らなければなりません。

「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」（コリント一・二・3）とあるように、霊的真の母であられる聖霊を通じてこそ、霊的眞の父であられるイエス様に連結されることを知らなければなりません。

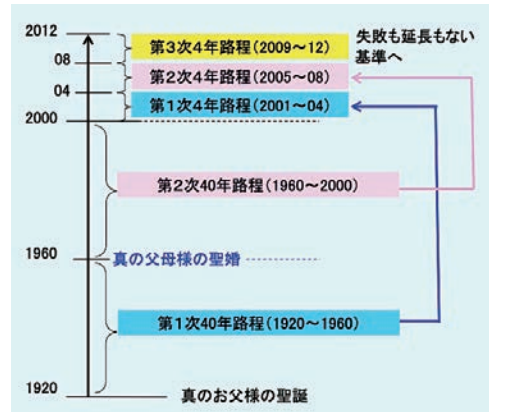
ところで、真のお父様は、本来なら二〇〇〇年までに全ての摂理を終えようとしておられましたが、しかしそれができなかったため、お父様は次のように語っておられます。

「八〇歳でカナンを復帰して天下統一をしなければならなかったにもかかわらず、それができなかったのです。……まだアベル・カインが残っているの……アベル・カインの撤廃を宣布したのです。そして、今から百二十年（百二十歳）になる時までに、すべてを終えなければなりません。……それを管掌する先生は、最初の四十年、八

十歳までの四十年、今の四十年をそれぞれ四年として、二〇〇一年から二〇二二年まで、九十二歳を中心とする二〇二二年までにすべてを終えるのです」（『後天時代と眞の愛の絶対価値』二五五ページ）

図のように、戦後のキリスト教の不信によって失った第一次四十年路程、および眞の父母を支えきれなかった統一教会における第二次四十年路程を、それぞれ四年路程として蕩減し、失敗も延長もなかった基準を立てるために歩まれた二〇〇九年から二〇二二年までの第三次四年路程がありました。

二〇〇一年から二〇二二年に至る期間、それぞれの四年路程の出発点である二〇〇一年一月十三日の「神様王権即位式」【写真1】、二〇〇五年二月十四日の「天宙統一平和の王戴冠式」【写真2】、二〇〇九年一月三十一日の「万王の王神様解放圏戴冠式」【写真3】のお写真【写真1】を見れば、眞の父母様の座られた椅子の背後には神様の白い玉座が二つあり、神様は「天のお父様」と「天のお母様」であることが分かります。



当連載の第11回「お母様も『神様の立場』に立つておられる」で論じたように、二〇〇六年六月十三日の「天地人眞の父母様天正宮入宮・戴冠式」のお写真【写真4】でも分かるように、永遠なる「天一国」の基盤、およびその中心は、どこまでも天の父母様と眞の父母様であって、決して眞の子女様ではありません。「第二代王」などという概念はないのです。

『原理講論』に、「イエス以後においては、イエスと聖霊とが、直接、信徒たちを導かれたので、それ以前の摂理時代のように、ある一人の人間を神に代わって立てられたのではなかった」（四六九ページ）とあるように、「眞の父母」が現れたなうに、それ以前の時代の摂理のように、ある一人の人間を神に代わらせて導かれるのではなく、どこまでも神様の実体として顕現された「眞の父母」が、直接